# 「聞こえづらくはないですか？」-難聴への積極的な介入-

耳鼻咽喉科部長　片田 彰博

高齢化率が世界第2位の本邦で最も頻度の高い難聴は加齢性難聴であり、65～74歳では3人に1人が、75歳以上では約半数の方が難聴に悩んでいるといわれています。しかし、難聴のことを医師に相談する患者の割合は、欧米が50～80%台であるのに対して、日本は38%といわれています。また、補聴器の普及率も欧米諸国が30～40%であるのに対して、日本は13.5%という低い水準になっています。このように本邦は難聴への対策が欧米諸国に比較してやや遅れています。

我々は患者から、「難聴であることが恥ずかしいので知られたくない。」、「一人暮らしなので難聴だがあまり困っていない。」というお話しをよく聞きます。日本人のメンタリティーが関係しているのかも知れません。しかし、難聴によって中枢に伝えられる音刺激が少なくなると、脳の萎縮や機能低下が進み、それが認知症の発症に影響することが明らかになってきました。また、難聴によってコミュニケーションがうまくいかなくなると、他人との会話を無意識に避けるようになってしまいます。その結果として、抑うつ状態が進み社会的に孤立してしまう危険性も指摘されています。日常生活に大きな支障がない軽度の難聴であっても、耳鼻咽喉科の診察を受けずに放置することはお薦めできません。

現代の医学でも加齢性難聴を治療することは非常に難しく、若い頃の聴力を再獲得することはできません。しかし、補聴器などの機器を上手に活用して聴覚を補うことは可能です。難聴へ積極的に介入することは認知症やうつ病の発症を予防し、生活の質を改善することにも繋がります。また、耳垢塞栓や中耳炎などによる難聴も珍しくはありません。これらについては適切な処置や手術治療によって聴力を改善させることが可能です。

すでにご覧になられた方も多いと思いますが、日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会はACジャパンの支援を受けて難聴に関する耳鼻咽喉科受診の重要性を啓発する広告を、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などで広く展開中です。

テレビの音や相手の声がまったく聞こえないのが難聴であって“聞き返し”や“聞き間違い”が多いことは難聴ではないと思っている一般の方がたくさんおられます。皆様が患者さんとお話しをしたときに、聞き返しや聞き間違いが多いと感じたら、積極的に耳鼻咽喉科の受診をすすめていただきますよう、よろしくお願いいたします。